



地域がはぐくんだ、ふれあいのつながりを訪ねて

愛ランドまーい

人と人のつながりがより身近な地域には、途切れることのない人の輪があり、脈々と継がれる絆があります。共同体意識に根ざした独特の活動を展開する各字を訪ねました。

地域ぐるみの子供育成

昭和三十一年、南風原町字兼城では日曜日と夏休みに、子供たちはほうきをかき、朝起きラジオ体操に参加することが日課だったといえます。

朝はラジオ体操のあと、集落の道を清掃し、夕方は小学校の先生の家へ宿題を持ってみんなで勉強会。遠足や、あいさつ運動も行いました。

この取組はこの地域の、ある小学校教諭が、地元南風原小学校に勤務したのをきっかけに、休み中の子供たちの健全な心と体づくりのために始まりました。

当時、各字に居住する学校教諭は、字の子ども会を指導する役割があり、父兄と連携して、児童生徒の教育環境を整える教育隣組を組織していました。

兼城では、地域ぐるみで子供たちをより良い方向へ育成しようという戦前からの気風が失われず、区長がPTA会長を買って出るほどでした。

昭和四十年、教諭の転勤により自宅での勉強会は途絶えたものの、夏休みラジオ体操はPTAの活動に引き継がれ、今や

半世紀を迎えることに。

時代とともに参加意識は変化しつつも、朝起きラジオ体操を提唱した教諭の姿勢は健在です。

小学校を定年退職した今でも教諭は、字兼城老人クラブ副会長や地域活動指導者として尽力しています。



昭和31年、字の中道で教育隣組1・2班の夏休みラジオ体操が始まった。



五十年のあゆみ、夏休みラジオ体操

南風原町字兼城の教育隣組活動

昭和35年、教育隣組3班は小学校運動場で夏休みラジオ体操

「八月カシチー(おこわ)」 発祥の地

那覇から東へ走る国道三百二十九号線と首里から南部地域へ下る県道八十二号線が交わる位置に兼城があります。

およそ、五十年前、首里より一族を率いて来た内嶺(ウチンミ)按司が、グスクを築き、すでにあった集落をまとめ、兼城村を誕生させました。

内嶺グスク城主二代目の頃、按司の次女がはやりの病で亡くなり、按司墓に葬られます。しかし、初七日頃に次女はよみがえり、牛を連れてその墓の前を通った百姓に墓の中から、自分が生きていることを両親に伝えるよう頼みました。

話を聞き駆けつけた按司は、次女を墓の中から助け出す際、すそを左結びにして桑の枝を添え、悪霊払いをしたといいます。

グスクでは、次女の初七日の法要に、餅米を炊いていたのですが、次女が生き返ったため、それが祝いの赤カシチーに変わり、百姓の牛は祝いの膳をかざる肉として供えられました。

この蘇生伝説から、旧暦八月におこわを供えるカシチーの祭祀がおこりました。

兼城では、現在の日を「ウシ小御願」と呼び、牛の肉で味噌煮をこしらえ、グスク跡で御願を執り行います。そして各家庭では、牛の血を塗った桑の枝とすそを家の四隅にさし、魔除けとする習慣が残っています。

来る十月一日(旧暦八月十日)には、兼城の伝統芸能、大狂言「カシチーの由来記」が約七十年ぶりに上演されます。



南風原町字兼城集落



兼城の朝起き会を創設した大城道吉氏は、今も子供たちの夏休みラジオ体操を見守り続ける。



南風原町

琉球絣、伝統芸能の彩り、 そしてカボチャ実る田園都市

生活の利便性に富み、特産物の生産で活気づく。南風原町は、都市と農村との調和がとれた田園都市の可能性に満ちあふれています。

「琉球絣の里」宣言

国と県の伝統工芸品に指定された琉球かすりの産地として、分業システムを整え、昭和52年日本全国に向けて琉球絣の里宣言。



「カボチャの産地」宣言

カボチャの収穫・出荷量で、県内の約半分を占め、主に本土への出荷を果たしています。昭和51年産地宣言。



「ストレリチア」 生産高日本一

年間2万本のストレリチア(極楽鳥花)を生産して、その95%を本土へ出荷しています。



ブーゲンビレア(町花)

南風原町概要

沖縄本島南部のほぼ中央に位置。周りを6つの市町に囲まれ、県内では珍しく海に面していない町のひとつです。農業、織物などの生産が原動力となり発展、近年は那覇市に隣接する地の利を得て、企業が進出し、発展し続けています。